NOV.2 1. 19
図書館

佐伯史談

第六十七号

「郷土史研究」誌
通算第八十九号

昭和四十五年八月廿八日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字長護寺 羽柴方

記録

お頭様の落慶式に参列して

―佐伯惟治公を祀る瀬口の廟の新築―

本会会長 高木嘉吉

七月二十五日、羽柴幹事休石会員と共に標記の式に参列した。お頭様は後掲の由来記の様に、佐伯氏第十代惟治の頭を祀った所で、宮崎県北川村瀬口にある。同地の旅人クラブの人々が境内建物の荒廃をいたんで、はじめは修繕の計画であったが、だんだん話が大きくなって新築することになり、春から起した工事が完了して、惟治憤死の七月二十五日を期して落慶式を挙行したのである。新築の財源は寄附によったわけであるが、佐伯史談会員も多数の方が寄附に応じ、貳万余円を寄贈した。工事報告によれば工費七拾参万円、現在まで集つた金は五拾余万円で、も少し集めねばならぬとのことである。

旧殿に参詣された人はその荒廃ぶりが記憶に残っていることと思うが、全く面目を一新して、こじんまりした建物の中に、

大智院殿先薩正慶血大居士霊位

と刻まれた墓石が納められている。

皆さんに訴る機会を持ち得なかったが、扁額にして奉納した。休石会員の撰文、羽柴幹事の執筆になるもので、御新築記念に次の由来記を木板に記し、御殿の入口に掲げられた人々の注意をひいている。

（編集者 註）

お頭様は、日豊線市棚駅下車、歩いて十分ほどの川向う、瀬口中学校の裏手、小さな谷間にある。小さなお堂だが、延岡のすぐれた堂宮大工さんによる新築でかなり凝った建築、屋根は勿論本瓦葺である。以上頁組の都合で記す。

本号内容

記録 お頭様の落慶式に参列して
―佐伯惟治を祀る廟―（高木嘉吉）…一
書翰 佐伯史談六十六号を読んで（矢田 清）…三
〃 浪速の津を変りゆく（木田長）……四
研究 佐伯と国木田独歩（七）
若宮八幡宮（山本 保）……五
伝承 潮谷寺古仏の由来（山岸田善市）……一〇
研究 佐伯の港はどんな働きをしているか……一二
佐伯港の臨海工業（つづき）
主要工業の内容と問題点（市野澄仁）
研究 村里にでむくもの（羽柴 弘）……一九
―赤木村大庄屋文書の周辺（七）―
文藻 日田・中津・文教の史跡を訪う……二三
集会案内 寄附報告、外……二四

佐伯薩摩守惟治公を祀る

霊廟　おとうさま　由来記

そもそも日向国川内名瀬口のここにありしといふ玉来山寶泉寺の草創は、今より凡そ六百年の昔に遡るべく、往時は山陰の鵜徳寺の末寺として代々盲目の僧が配住され、住職は琵琶を弾じ地神経を誦して檀家をめぐり、以て寶泉寺の法燈を守られし由なり。

たまたま大永七年秋、豊後国梅牟礼の城主佐伯薩摩守惟治公、故ありて主家大友氏より攻められ三川内に落ち来るに、新名治部太夫の一統多勢を以て迎え撃ち、遂に展高知の峯に悲憤の最期を遂げ給ふ。時に御年三十三才なりしと伝へらる。生き残りたる一人の家臣は、主君の首を敵に渡さじと、涙ながらに小袖に包み、夜陰に紛れて山の尾根間道を伝ひて落ちゆき、疲れたる身をもつてここ寶泉寺に辿りつき、境内のけんぼうなしの枝に首級の包みをかけて休息し、さて出発せんとすれば不思議やな包みにわかに重くなりて動かすこと叶はず、止むなく事の次第を具さに住職に告ぐれば、住職は戦国の習とは言へ惟治公の悲運を深く悔みて、いとも懇ろに読経の上境内に手厚く葬り、年毎の祭祀供養を怠ることなく、以来四百数十年、おとうさま大明神とこそ称へ申し崇め奉れば、惟治公の御霊はじめて安まり、恩徳断く村里に及びて崇敬参拝の風次第に昂まりしとぞ。

さる程にかかる由緒ある寶泉寺も、星霜を重ねていつしか衰微し、堂宇は荒廃して無住の寺となり、ただ僅かに惟治公を祀るおとうさまの必音信によりて祭りつがれて変ることなく、古来より頑かいたる、血かやまい、さては学生たちの受験のねがひ、その他もろもろの祈願をこむるに、霊験いとも著らたかにして諸願成就ならざるはなしとし、近郷は言ふまでもなく、遠く宮崎、大分などより崇敬者男女打ち続き、堂内には常に燈明香煙のたゆることなしといふ。

今はすでに廃絶したりといへども、かかる歴史をもつここ寶泉寺の名残を止むる堂宇、その古式たるを改築すべく瀬口老人クラブの発起したるを、里人ら善びて賛助し、挙つて多くの浄財を寄せて霊廟の新築とすすめ、今日かくの如く松の香も高く竣工し、荘厳の気いやましてまことにたぐひなきおとうさま大明神と仰ぎ奉り、恩徳無窮と崇め申すものなり。

ここに今惟治公の御霊前にぬかづき、はるかに大永の昔展高知の峯の御最期を偲び奉り、尊霊とこしなへに安らけく鎮まりまし、庶民等の願望護らせ給へと謹び　この里の老い人らの美挙をたたへつつ、いささか由来を識して後世に貽さんとするものなり。

佐伯薩摩守惟治公御肖像四百四十三年御命日
昭和四十五年七月二十五日　霊廟落慶の日

梅牟礼古城下

奉納　佐伯史談会

会員　林石博美謹撰

午前十一時から地元の寺院の住職と、おなじく佐伯市から参列した佐伯氏の菩提寺、龍護寺の若手住職を導師として、落慶の式が厳粛に執り行われ、ついで瀬戸の幼童館で祝賀の宴が張られた。祝賀会は和気あいあいの雰囲気の中に進行したが、北川村長中井平一郎氏の祝辞は印象深いものであった。中井村長が今回の建築に当って、終始積極的に協力されたことは、須藤老人クラブ会長から聞いておったのであるが、お頭様は北川村の大切な文化財であるから、永久に保存顕彰せねばならない。その故に自分は終始協力を惜しまなかった。参列の皆さんも認識を新たにして、信仰は自由であるが文化財としてのお頭様の保存顕彰に協力して戴きたい。——とのことであった。

それから、老人クラブの方々の熱意も特筆さるべきものである。寄附者の芳名が社殿の前庭に書き出されていたが、北川村を中心に延岡市、南浦村、北浦村全域にわたって、多数の人々から浄財を集めている。寄附者は別論惟治公に関心をもつ人々で、喜んで寄附に応じたものであろうが、老人クラブの人々が遠きをいとわず、老の足を運んで寄附募集に当った熱意には頭の下るものがあった。

私達は佐伯氏については、鎌倉時代以降四百余年に亘って佐伯地方を統治した領主として、敬慕の情を懐くものであるが、文禄二年十四代惟定が伊豫に去ってから、佐伯氏と佐伯の地の関係がうすくなり、長い年月と共に諸事湮滅し、歴代の墓も定かでないものが多く、祀る人もなく哀憐の情を禁じ得ない。

その中で惟治公は各地に神として祀られている特異な存在であるが、其の遺骸を収めた棺槨が、尾高知爾と言いお頭様と言い、佐伯人なら及他郷人によって祀られていることは奇しきことである。お頭様の発端を作す惟治の一家臣が、尾高知爾から惟治公の頭と持ち来ったということは、私はあり得たことと信ずるものであるが、そんなことはあり得ないとの反論も出来る。しかし霊廟があり参詣者のあることは、それが真実であったとして次第に歴史上に位置づけることになる。

とは角、佐伯の郷土史をさぐる人々が、是非訪れねばならない史蹟の一つが、瀬戸老人クラブの人々によって保存顕彰されたことは近来の快心事である。

（おわり）

主題論

佐伯史談（第六十六号）を読んで

宝泉の森龍にて　　矢田　清

拝啓

今年は無例年長梅雨で、各地に被害続出、然し佐伯地方には格別の事も無き様子で、先ず目出度とお慶び申し上げます。二十日第六十六号史談誌到着、毎度お手数の段深謝致します。今月から豊南高校生ら九名の入会を得て、史談会も愈々大発展です。

三の丸御殿移築費助成費も現在では四万八千円程集まった由で（編者注八月十日現在七万九千円）、佐伯の人達はさほどにも思っていない様ですが、藩公の私邸が残っているのは九州では唯一と佐伯位のもので、本当を言うと会館として各種の会合に使用するという事は控えるべきです。

拙歩日誌中の養賢禅寺門札、一、大衆禅堂　二、碧巌録提唱　三、江湖専門道場　昔から一の大衆禅堂は見た事なく、碧巌録は雪竇（セッチョウ）撰集の禅問答一百則に田舎が注を施したもので、雪竇は東司即ち便所清掃役であった為、